

日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2015年度 助成者)

作成日 2015年11月10日

氏名 (フリガナ)	依田 かおり (ヨダ カオリ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2015年10月11日 (日) ~ 10月17日 (土)
所属機関名	鹿児島赤十字病院
身分	看護師

私は、現在看護師5年目でちょうど、毎日の生活や仕事にマンネリを感じていた。その際に、この留学のパンフレットを偶然目にする機会があり、自身の夏休みも兼ねて、参加してみようと思い申し込んだ。そんな、軽い気持ちでオレゴンのポートランドに降り立った。飛行機の中ではほぼ不眠だった初日の記憶は申し訳ないほど少ない。その分、翌日からの病院や、施設見学では、アメリカならではの設備や看護体制に大いに羨ましさを感じ、刺激的な日々だった。講師として来て下さった方々も、皆、自分の仕事に誇りを持ち、笑顔と自信に溢れていた。

そんな様々なプログラムの中でも、特に印象に残っているのは、「尊厳死」に関する講義である。私の中で、この制度はアメリカならではの YESorNO の意思表示の現れの典型ともいえるものだと思っていたが、実際に話を聞くと、個人、家族、友人、それぞれに様々な葛藤を抱き、ぶつかり、または共感し成り立つものである事に驚きを感じ、本人の意思決定から実施に至るまでのプロセスは並々ならぬパワーがいたと思った。その選択に至る理由は様々であるという事であったが、忘れられないのが「孫に(死)というものは怖くないものだ」と教えるのは私の役目よ。」と言って、この制度を利用し、家族に見守られて息を引き取った人がいたという話である。賛否両論のある制度ではあるが、この話を聞いた時は、その光景がリアルに思い浮かび、ご本人の目的が確実に達成されたのだろうと確信できた。

今回の私の研修参加の動機は、他の参加者よりとても曖昧だった様な気がする。しかし、そのような曖昧な動機での参加でも有意義な時間を過ごすことができ、学びも多く、刺激的な7日間だった。共に参加したメンバーや、今回関わって下さったスタッフにもとても恵まれていたように思う。そのことは、帰国後、早速病院のスタッフにこの研修を勧めたことから分かっていただけるであろう。今回受けた刺激を糧にして、今後の自分の人生を豊かにしていく努力を惜しむことなく、邁進していきたいと改めて強く思った。